

「二」次の文章を読んで後の問に答えなさい。

ある日、次郎は、正木の家の庭石にただひとり腰をおろして、一心に築山のほうを見つめていた。築山のあたりには、にわとりが六、七わ、さっきからしきりに土をかいては餌をあさっている。雄が二わまじっているが、そのうちの一わは、もうこの家に三、四年も飼われている白色レグホンで、次郎の目にもなじみがある。もう一わはそれよりずっと若い、やっと一年ぐらいの地鶏である。そのよごれない黄かった色の羽毛が、ふっくりとからだをつつんで、いかにも元氣らしく見える。

ところで、この地鶏は、ぼつんと一わ、さびしそうに群れをはなれて立っている。おりおり首をすつとのばして周囲を見まわし、それからそろそろとめんどりの群れに近づいていくのであるが、すぐ老レグホンのために追われてしまう。追われるまえに、ちょっと首毛をさか立ててはみる。しかしどうも思いきってたたかってみる決心がつかないらしい。が、そんなことをなんどもくりかえしているうちに、地鶏の首毛の立ちぐあい、しだいに勢いよくなってきた。次郎はそのたびに息をはずませては、もどかしがった。

彼は、ふと、喜太郎のひざの肉をかみ切ったときのことを思いおこした。そして、思いきってやりさえすれば、わけはないのに、と思った。が、同時に、彼の心には、恭一や俊三とけんかをするときのことがかんできて、腹がたった。

「次郎、おまえはにいさんに手むかいをする氣かい」。彼は母や祖母にいつもそういわれるので、つい手をひっこめてしまう。では、俊三になら遠りょなくかかっていけるかというと、そうもいかない。「次郎、そんな小さな弟をあいてになんです。負けておやりなさい」とくる。どちらにしても次郎にはつごうがわるい。そして、なによりも次郎のしゃくにさわるのは、彼がしかられて手をひっこめたしゅん間に、きまってあいてがひとつかふたつなぐりどくをしてひきあげることである。祖母は、わざわざそのなぐりどくがすむのを待って、双方をひき

わけることにしているらしい。しかもぬけぬけと、「もういい、もうそれでがまんしておやり」などという。そんなときの次郎の無念さといったらない。問五彼は、自分の目が、溶鉱炉ようこうろのように熱くなり、なみだが氷のようにまぶたにしみるのをおぼえるのである。

(ひとりでは学校にもいけない俊三ではないか。喜太郎のまえでは、口ひとつきけない恭一ではないか。ぼくはなんでこのふたりに負けてばかりいなければならないのだ)

(母や祖母の小言がなんだ。兄に手むかいするのがわるいなら、俊三がぼくに手むかいするのを、なぜとめない。弟に負けてやるのがほんとうなら、恭一がぼくをなぐるのをなぜしからない。ふたりのいうことはいつもとんちんかんだ。それにふたりはぼくが損をしてさえいれば、いつもにこにこしている。ぼくがぼくのすきなことをしたときに、ふたりがうれしそうな顔をしたことなんか、いちどだってありゃしない。そしてなにかといえ「氏より育ち」という。なんのことだかわかりゃしない。おおかたばあやをわるくいうつもりなんだろうが、ばあやはだれよりも正直だ。ぼくのすきなことはばあやもすきだし、ばあやのすきなことはぼくもすきだ。学校で一番になることだって、ぼくはけっしてきらいではない。ただめんどくさいだけなんだ。――)

いったいふたりはぼくをどうしようというのだろう。ぼくが家にいると、ふた口めには、この子さえいなかったら苦労はないが、という。だからぼくはなるだけ家にはいないことにしているんだ。すると、こんどは、なぜそんなに老人に心配をかけるのかとか、親の心がまだわからないのかとか、まるで、お寺の地ごくの絵にかいてある青鬼おにのような顔をして、どなりつける。心配なんかせんでおけばいいじゃないか。

いったい祖母や母がぼくのためになにを心配するというのだ。問六ふたりの気持はたいていぼくにわかっている。わかっているから、ぼくはなるべく家にいない工夫をしているのではないか)

(学校の先生が修身で話してきかせることなんかも、半分はうそらしい。だいいち、親の恩は海よりも深しなん

ていうが、そんなことは、父にはあてはまるかもしれないが、母にはちっともあてはまらない。それに先生は、ばあやのようないい人のことを、ちっとも話してくれないのがふしぎだ。学校で毎日毎日ばあやの顔を見ているくせに)

問七こんなことを考えながら、次郎はいつのまにか、視線を自分の足先に落としていた。

と、築山のほうから、きゅうにはげしいはたきの音が聞こえた。見ると、地鶏が、いつのまにかレグホンにむかって決死のたたかいをいどんでいる。燃えるようなとさかの周囲に、地鶏は黄の、レグホンは白の、首毛の円をえがいて、三、四寸注二のきよりに相対峙あたいじしている。ひまわりとびゃくれんが、血をふくんで日のなかにふるえているようだ。

とうとう蹴けあった。つづげざまに二回。問八しかし、一回とも地鶏の歩ふがわるかった。次郎は思わず腰をうかして、「ちくしょう!」とさげんだ。

地鶏は、しかし、にげようとはしなかった。やや間をおいて、白と黄の羽が、三たび地上尺余注三の空にあいうつた。こんどは互角である。つづいて、四回、五回、六回と、蹴あいはあいかわらず互角にすすんだ。次郎は、息をとめ、こぶしをにぎりしめ、首をまえにつきだして、それを見守った。

たたかいはしだいに乱れてきた。さいしょまったく同時であった両者の跳躍ちようやくが、いつのまにか交互になった。そしておたがいにくちばしで敵のとさかをかむことに努力しはじめた。こうなると、若さが万事を決定する。レグホンの古びきった血液は、強れつな本能のにおいをとかしこんだ地鶏の血液に比して、はるかにじゅんかんがにぶい。彼の打撃げきはしばしば的はずれた。地鶏が打撃を二度くわえるまに、彼はいちどしかくわえることができなくなった。そして、どうかすると、ひよろひよろとあいてのまたの下をくぐって、その打撃をさけた。

老雄やうゆうの自信はついにくだけた。彼は、くろずんだとさかに鮮血せんをにじませ、くちばしを大きくあけたまま、ふ

らふらと築山のおくににげこんだ。若い地鶏は、勝ちに乗じてそのあとを追ったが、やがて、築山の頂に立って大きなはたきをした。そしてめんどりの群れを見おろしながら、たかだかとのど笛を鳴らした。

次郎はほっとして、立ちあがった。そして大きく背のびをしてから、そろそろと築山のかげにまわってみた。老英雄は、夢にも予期しなかった若い反逆者のために、そのながいあいだの支配権をうばわれて、ひっそりとかき根に身をよせている。築山の上では、地鶏がもういちど勝ちどきをあげた。それから、土をかいて、くっくつとめんどりを呼んだ。

次郎はきゅうに勇壮な気持になった。問九彼の体内には、冷たい血と熱い血とが力強く交流した。問十つづいて影のうなほほえみが、彼の顔をよこぎった。

その夕方、彼はだれのむかえもうけないで、きゅうに正木の祖父母にあいさつして、ひとりで自分の家に帰ったのである。

次郎は、それ以来、学校の往復に俊三のお供をすることを、だんじて肯んじなかった。そのことについて母がなんといおうと、彼はろくに返事もしなかった。朝になると、わざとのように、みんなのいるまえを通して、ひとりでさっさと学校にいった。帰りには、きまって道草をくった。ただ以前とちがったところは、夕飯の時間までには、ふしぎなほどきちんと帰ってくることであった。しかも彼は、母や祖母にしっぽをおさえられるようなことをめったにしなくなった。彼は、父のまえではそうとうしゃべりもし笑いもしたが、いったいに家庭ではちんもくがちであった。恭一や俊三に対してすら、自分のほうから口をきくようなことはほとんどなかった。そしてなにかしら、すべてに自信あるもののごとくふるまった。それがおばあさんの目にはいよいよにくらしく見えたのである。

お民は、さすがに、おばあさんよりもいくらかものを深く考えた。しかし、考えれば考えるほど、次郎をどう

あしらっていいのか、さっぱり見当がつかなくなってきた。そして、おりおり俊亮にしみじみと相談を持ちかけるのだった。「いまのままでいいんだよ。おまえたちは、どうもあれをうたぐりすぎていかん」。俊亮の返事はいつもこうだった。しかし、彼とても、次郎のほんとうの気持がわかっていくわけではなかった。問十四ア

次郎の目には、正木の家で見た若い地鶏が、いつもちらついていた。注4しかし彼は、機会を選ぶことをけっして忘れなかった。めったなことでは兄弟げんかをはじめて、また父にきせるでなぐられたりしてはつまらない、と思ったのである。そのかわり、これならだいじょうぶだと思ふ機会さえ見つかれば、母や祖母がどんなに圧ばくしよと、こんどこそは死にものぐるいでやってみよう、という決心がついていた。

ところで、そうなると、思うような機会はなかなかやってこない。それに、だれもが、このごろの彼に対して、以前とはちがって警戒の目を見はっている。恭一や俊三は、おばあさんのさしがねもあって、めったに彼のそばによりつかない。問十一みんなが遠まきにして彼を見守っているといったふうである。彼は多少手持ちぶさたでもあり、しゃくでもあった。しかし、それならそれでいい、とも思った。そしてあいかわらずむっつりしていた。問十二

うめの実が色づくころになった。問一ア彼は、例によって、学校の帰りに五、六人の仲間と墓地で戦争ごっこをはじめていた。そこへ、おくれではせつけた仲間のひとりが、次郎の顔を見ると、おおぎょうにさげんだ。「恭ちゃんが、いじめられているようっ」。

次郎はべつに驚いたようすもなく答えた。「はっとけよ。つまんない」。彼は、恭一がおりおり友だちにいじめられているのを知っていた。それを彼はべつに気味がいいとも思わなかったし、かといって、同情もしていなかった。つまらない、というのが、実際、彼のありのままの気持だった。

「でも、橋の上だよ、あぶないぜ」。「恭ちゃんはすぐ泣くんだから、あぶないことなんかあるもんか」。彼は、持っていたぼう切れを墓石の上にのせ、射撃をするまねをしながら、そういって、とりあわなかった。

「でもいってみよう。おもしろいや」。戦争ごっここの仲間のひとりがいった。二、三人がすぐそれに賛成した。「だれだい、いじているのは」。次郎は、あいかわらず射撃のまねをしながら、おちついてたずねた。「ふたりだよ」。「ふたり?」。次郎は射撃のまねをやめて、ふりむいた。「そうだい、だから恭ちゃん、かわいそうだい」。「おい、みんないこう」。次郎はなんと思ったか、こんどは自分から、みんなの先頭に立って走りだした。村はずれから学校に通ずる道路のなかほどに、土橋がかかっている。その橋の上に、恭一をばさんで、前後にふたりの子どもが立っていた。次郎の一隊は、橋の五、六間<sup>（注5）</sup>てまえまでいくと、いいあわしたように立ちどまって、そこから三人のようすをながめた。

恭一は泣いていた。彼をいじめていたふたりは、ふりかえってしばらく次郎たちの一隊を見ていたが、自分たちより年下のものばかりだとみて、安心したように、また恭一のほうにむきなおった。「女ずきのばか!」。そういって、ひとりが恭一のひたいを指先でおした。すると、もうひとりが、うしろから彼の肩<sup>（注6）</sup>をつかんでゆすぶった。次郎は、これはたいしたいじめかたではないと思った。

が、このとき、橋のむこう半町<sup>（注7）</sup>ばかりのところに、ひとりの女の子が、しょんぼりと立っているのが、ふと次郎の目にとまった。真智子である。本田の筋むかいの前川<sup>（注7）</sup>というそほう家のむすめで、学校にかよいだすころから、恭一とは大の仲よしであった。学校も同級なため、ふたりは友だちにはばかりながらも、よく連れだって往復することがある。次郎は彼女が恭一とばかり仲よくするのがしゃくで、ろくに口をきいたこともなかったが、内心では、彼女がひじょうにすきだった。ときたま、彼女のすんだ黒い目で見つめられたりすると、つい顔をあからめて、うつむいたりすることもあった。

彼は、恭一がいじめられているわけが、すぐわかった。そして、真智子のまえではじをかいている恭一の顔を、じっと見つめていたようなしょう動にかられた。しかし、いじているふたりに対しては、けっして好感がも

てなかった。ことに、真智子のしょんぼりした姿が、どうしても彼をおちつかせなかった。彼はしだいになんとかしななければならないような気がしだしてきた。

問十四イ ここでも若い地鶏が彼の目のまえにちらついた。彼は、やにわに橋の上に走っていった。恭一のまえに立っている子どもをおしのけながらいった。「恭ちゃん帰ろう」。おしのけられた子どもは、しかし、ふりむくと同時に、思うさま次郎のほったをなぐりつけた。次郎はちょっとたじろいだ。が、つぎのしゅん間には、彼はもうあいての腰にしがみついた。横綱<sup>（注8）</sup>とふんどしかつぎのすもうがせまい橋の上ではじまった。

「ほうりこめ! ほうりこめ!」。恭一のうしろにいた子どもがさげんだ。しかし次郎は、どんなにふりまわされても、あいての帯をにぎった手を放そうとしなかった。

とうとうふたりがかりで、次郎をおさえにかかった。次郎は、かわいた土の上に、あおむけにたおされた。土ぼこりで白ちゃけた頭が、橋のふちからつきだしている。一間下<sup>（注9）</sup>は、うすみどりの水草をうかしたほりである。しかし次郎は、そのあいだにも、あいての着物のすそをにぎることを忘れていなかった。ふたりはすこしもてあました。そして次郎の指を、一本一本こじおこしにかかった。と、次郎は、やにわに両足で土をけて、自分の上半身を、わざと橋のふちからつきだした。

重心は失われた。次郎のからだは、さかさに落ちていった。着物のすそをにぎられたふたりが、そのあとにつづいた。水草とひしの新芽とが、さんざんに乱れて、しぶきをあげ、うずをまいた。橋の上では恭一と真智子と次郎の仲間たちとが、一列にならんで、青い顔をして下をのぞいた。

三人ともすぐきあがった。さいしょに岸にはいあがったのは次郎であった。着物のすそがぴたりと足にまきついて、しずくをたらしている。彼は、顔にくっついた水草をはらいのけながら、あとからはいあがってくるふたりを、用心深く立って見ていた。ずぶぬれになった三人は、あしの若芽のなかで、しばらくにらみあっている

たが、もうどちらも手を出そうとはしなかった。

「おぼえてろ」。あいてのひとりがそういつて土手をあがった。もうひとりはまだまってそのあとについた。次郎はふたりを見送ったあとで、はだかになってひとりで着物をしぼりはじめた。

「みんなでしぼろうや」。仲間たちがぞろぞろと岸におりてきた。恭一と真智子は、しょんぼりと道に立っていた。次郎は、しぼった着物を帯でくくって肩にかつぐと、はだかのまま、みんなの先頭に立って、軍歌をうたいながら帰っていった。

問十五

彼は、真智子もこの一隊の後尾にくわわっているのを知って、たまらなくゆかいだった。恭一とけんかをしてみようとこの気は、そのときには、彼の心のどのすみにも残っていなかった。

問十六

恭一は、もう   ような気がしていたのである。

(下村湖人『次郎物語』)

〈注1〉旧制の小・中学校の教科の一つ。道德教育を授けたもの

〈注2〉長さの単位。一寸は約三センチメートル 〈注3〉長さの単位。一尺は約三十センチメートル

〈注4〉刻みタバコを吸うための道具 〈注5〉長さの単位。一間は約一、八メートル

〈注6〉きよりの単位。一町は約一〇九メートル 〈注7〉財産家。大金持ち

問一 ―― ア・イと同じ意味で用いられているものをそれぞれ選びなさい。

ア おおぎように

- 1 ご子息が結婚なさったとのこと、おおぎようにおよろこび申し上げます
- 2 今年は夏の間天候にめぐまれて、キュウリもトマトもおおぎように生育した

イ はばかり

- 1 ねている他の乗客をはばかり、私たちは電車内での声高なおしゃべりをやめた
- 2 話し合いの方向が定まってきたのをはばかり、議長は採決に移ることを提案した
- 3 ひどく寒そうにしている客の顔色をはばかりいた母は、温かいお茶をすすめた
- 4 不正をしている人が世間にはばかりいるのを見ると、どうにもやりきれなかった

問二 「次郎」は何人兄弟の何番目ですか。

問三 ―― 部「次郎はそのたびに息をはずませては、もどかしがった」とありますが、「次郎」はどのような

ことを「もどかしがっ」ているのですか。

- 1 若い方が強いに決まっているのに、地鶏が老レグホンとの戦いを最初からあきらめてしまっていること
- 2 こどくな地鶏が遠りょがちに群れに近づいていくのに、老レグホンがじゃまをして近づかせないこと
- 3 若い地鶏がいまにも飛びかかっていきそうな様子を見せるのに、なかなか飛びかかっていかないこと
- 4 老レグホンが何度もけしかけているのに、若い地鶏がさそいに乗らず冷静に機会を見極めていること

問四 ―― 部「祖母は、わざわざそのなぐりどくがすむのを待って、双方をひきわけることにしているらしい。

しかもぬけぬけと、『もういい、もうそれでがまんしておやり』などという」とありますが、この部分から「次郎」にとって「祖母」はどのような人であるとわかりますか。

- 1 年長者を大事にする昔かたぎの人
- 2 だれに対しても厳しくしつけをする人
- 3 男の子の気持がわからないどん感な人
- 4 他の兄弟ばかりをえこひいきする人

問五 — 部「彼は、自分の目が、溶鉱炉のように熱くなり、なみだが氷のようにまぶたにしみるのをおぼえるのである」とありますが、このときの「次郎」の気持としてふさわしいものを三つ選びなさい。

- 1 ひきょうな相手に対する怒り
- 2 何も言い返せないつらさ
- 3 弱い兄弟たちに対するさげすみ
- 4 味方を失ってしまったさみしさ
- 5 無理やり敗北を強いられるくやしさ
- 6 反抗してもむだだというあきらめ

問六 — 部「ふたりの気持はたいいばくになんか、わかってる」とありますが、「ふたりの気持」とは具体的にどのような気持ですか。本文中から二十字以内でぬき出しなさい。

問七 — 部「こんなことを考えながら、次郎はいつのまにか、視線を自分の足先に落としていた」とありますが、このときの「次郎」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 自分は母や祖母に何を言われてもいっこうにかまわないが、自分に関わったせいではあやまでもが親たちや学校の先生に無視されるのはたえられず、むしうに申しわけなく思っている
- 2 めんどろな勉強からのがれたい一心で母や祖母に逆らったり兄弟に乱暴してしまっただけなのに、父以外に理解してくれる人がだれもおらず、心細くさびしい気持になっっている
- 3 母や祖母の自分に対する不当なあつかいを思い出せば思い出すほど、他の兄弟とちがって自分だけが受け入れられていない存在なのだとしみて感じられ、暗く重い気持になっっている
- 4 理由はどうあれ大人たちを敵に回してはとうてい勝ち目がないのだと思うほど、母や祖母に取り入る他の兄弟のやり方がうらやましく、それができない自分をふがいなく思っている

問八 — 部「しかし、二回とも地鶏の歩がわるかった。次郎は思わず腰をうかして、『ちくしょう！』とさけんだ」とありますが、このときの「次郎」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 敵に向かっていく地鶏の力強さに感心し、たとえ負けても自分だけは味方してやろうと意気こんでいる
- 2 群れを従えて数の力に任せ、こどくな地鶏をいじめるひきょうな老レグホンに腹を立てている
- 3 地鶏に自分の姿を重ね、自分が老レグホンの勢いに押されているかのようにくやしっ思っている
- 4 負けそうになっっている地鶏にかわって、自分が大声を出して老レグホンをいかくしようとしてる

問九 — 部「彼の体内には、冷たい血と熱い血とが力強く交流した」とありますが、「冷たい血」と「熱い血」はそれぞれ何を表していますか。ふさわしいものを一つずつ選びなさい。

- 1 正義が勝利する様を目の当たりにした興奮
- 2 予想通りの展開になっしたことによるそう快感
- 3 勝負を見届けることができた安心感
- 4 勝ち目のない自分に対するあざけりの気持
- 5 敵に立ち向かっていこうとする活力
- 6 相手を傷つけてやろうとする残こくな気持

問十 — 部「つづいて影のようなほえみが、彼の顔をよこぎった」ときの「次郎」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 いかなる境ぐうをも受け入れ前向きに生きようという勇氣がわきあがった
- 2 自分をふみにじっている相手に復讐してやろうという決意が固まった
- 3 これまでのおく病でせん細な自分の姿が次次と頭に浮かび氣はずかしくなっった
- 4 敗者の行く末をとことん確かめてやろうとする意地悪な氣持が芽生えた

問十一 — 部「しかし、それならそれでいい、とも思った」とありますが、「次郎」がそのように思ったのはなぜですか。

- 1 恭一や俊三が自分に寄りつかないのは次郎が強いと認めているということになり、そのことで自尊心が満たされたから
- 2 兄弟げんかをする機会がなければ自分が父からなぐられることもないと気づいて、安心して気が楽になったから
- 3 どこまでも自分のしよとすることをじゃまする母や祖母の仕打ちがぐやくて、ふてくされた気持ちになつてしまつたから
- 4 自分が期待しているような機会がなかやつてこないで、復讐することが半ばどうでもよくなつてきたから

問十二 — 部「うめの実が色づくころになつた」という一文は、この文章のなかでどのような効果をあげていますか。

- 1 自然とともに次郎も大きく成長したことを印象づける効果
- 2 次郎の心のおくの不満がどんどん増していくことをほのめかす効果
- 3 いよいよ次郎の待つ機会が目前にやつてきていることを暗示する効果
- 4 兄弟げんかをしなくなつてから長い時間がたつていることを強調する効果

問十三 — 部「彼はしだいになんとかしなければならぬような気がしだつてきた」のはなぜですか。

- 1 仲間の手前、いじめられている兄を放つておくわけにはいかなかったから
- 2 自分がひそかに思いを寄せている真智子に悲しい思いをさせたくなかったから

- 3 こわくてにげ出したいという本音を仲間にとられたくなかつたから

- 4 次郎なら恭一を助けてくれるだろうという真智子の期待を裏切りたくなかつたから

問十四 「次郎の目には、正木の家で見た若い地鶏が、いつもちらついていた」(~~~~部ア)、「ここでも若い地鶏が彼の目のまえにちらついていた」(~~~~部イ)とありますが、「若い地鶏」の記おくは、「次郎」にとつてどのような意味をもつものですか。

- 1 世の中の悪に正面から立ち向かつて戦えば正義が必ず勝つという意味
- 2 あえて手出しせずじつと待っていれば必ず相手が弱点を見せるという意味
- 3 本能のままに行動すれば何事も自分の思う方向に仕向けられるという意味
- 4 相手に屈せずこう撃を続ければ最後には支配者になれるという意味

問十五 — 部「真智子もこの一隊の後尾にくわつてゐるのを知つて、たまらなくゆかいだつた」ときの「次郎」の気持ちの説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 真智子がもう恭一に心を寄せていないことがわかつたので、やつと恭一と対等になることができたと思つてゐる
- 2 自分と恭一と真智子が協力していじめつ子を退けることができ、三人の間に生じた連帯感をうれしく思つてゐる
- 3 真智子と恭一を助けたことで祖母や母が自分を見直し、もうつらく当たることはないだろうとほのかに期待してゐる
- 4 これまで恭一とばかり仲良くしてゐた真智子を、いまや自分の方が完全に従えたという満足感にひたつてゐる

問十六

にはいるものを選びなさい。

- 1 いばったりはしない
- 2 彼の相手ではない
- 3 真智子には近づかない
- 4 いじめられることはない

問十七

「次郎」はどのような性格ですか。簡単に二つ書きなさい。

問十八 この文章の後に続く「次郎」の物語を、必ず「祖母」と「母」を登場させて、百八十字以内で創作しなさい。

「二」次の文章を読んで後の問に答えなさい。

「考える」ってどういうことなのか。私は考えることが商売だから、しょっちゅう考えているが、考えているとき、何をしているのか。実は、何もしていないのである。

あ、いま、すごく誤解されそうなことを言ってしまったかもしれない。断じて、私は、たんにさぼっているわけではない。考えている。しかしそのとき、歩いたり、うなったり、頭をかかえたりしているのであって、そのどれをとっても、これが「考える」ということだ、と言えるものはない。

単純な例だが、何を食べようかと思ひ、少し考えてチャーハンに決める。考えているしばしの間、私はとくに何かをしたわけではない。ただ、答えを思いつくのを待っていただけである。そう、この「待つこと」こそ、考えることにほかならない。

哲学などでもちがいはない。ただ待ち時間が長くなり、一時間、一日、ときに数年におよぶというだけのこと

だ。その間ずっと、問いのきん張を持続させ、答えが降りてくるのを待つ。

もちろん、ただぼーっとしているわけではない。かかえこんだ問いの観点から、すべてを見、すべてを聞く。ほとんどは問いとは無関係だが、しかしつねにそうやって問いのまなざしで見ていると、「あ、これだ」と思えるものに出会う。思わぬものが問いに結びつき、答えに近づくヒントになる。

考えることは、せっかちな頭には無縁のことである。その点、現代は難しい時代だろう。分からないことがあるとすぐにネットで調べる。ウェブ上で質問すると誰かが答えてくれたりする。だから、自分でじっくり考えるよりも、どこかにある誰か他の人の答えを探そうとしてしまう。

数学者高木貞治は、第一次世界大戦で専門書や論文が手に入らなくなり、むしろそのおかげで自分の考えに沈潜することができたという。私たちも、考えるためには

(野矢茂樹『哲学な日々―考えさせない時代に抗して』)

問一 この文章全体の内容をふまえて、筆者が言っている「考える」とはどのような行為かを三十字以内で書きなさい。

問二 筆者は、「現代」にはどのような問題があると言っていますか。本文中の言葉を用いて四十字以内で書きなさい。

問三 に、「私たちも、考えるためには」の後に続く内容を書きなさい。ただし、一行のわく内に二行以上書いてはいけません。

〔三〕 次の各文の——部が修飾している部分をそれぞれ記号で書きなさい。

- 1 三年後、<sup>ア</sup>私たちの<sup>イ</sup>学校は<sup>ウ</sup>創立<sup>エ</sup>百五十周年を<sup>オ</sup>むかえます。
- 2 昨日<sup>ア</sup>私が<sup>イ</sup>公園で<sup>ウ</sup>見つけた<sup>エ</sup>ウメの<sup>オ</sup>つぼみは<sup>カ</sup>今日は<sup>キ</sup>もう<sup>ク</sup>ほころんで<sup>ケ</sup>いた。

〔四〕 次の——部1～5のカタカナの部分を漢字で書きなさい。また——部6～8の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

- 1 モゾウ<sup>1</sup>ヒン<sup>2</sup>が<sup>3</sup>出まわる<sup>4</sup> ケワ<sup>5</sup>しい山道<sup>6</sup> ショ<sup>7</sup>チュウ<sup>8</sup>ウみまい<sup>9</sup> セ<sup>10</sup>キム<sup>11</sup>を<sup>12</sup>果<sup>13</sup>たす<sup>14</sup>
- 5 マク<sup>15</sup>があがる<sup>16</sup> 徳川<sup>17</sup>の<sup>18</sup>治世<sup>19</sup> 禁<sup>20</sup>物<sup>21</sup> 白<sup>22</sup>昼<sup>23</sup>夢<sup>24</sup>

ここは余白です。

